

# 幼兒の繪について

—母を目標として—

中 村 楠 雄

## ▽幼稚園でなぜ繪を描かせるのでせう△

幼兒は、其の成長發達のために、常に心身を活動せしめ、之と共に活動の資料を要求する。さうして幼兒の周圍には、種々無數の事物があり、常に幼兒を刺戟してゐる。併しこの事物中には、幼兒にとつて利あるもの、害あるもの混在し、幼兒は自ら之を選択取捨する能力不十分なるが故に、こゝに教師は其の指導の任に當らねばならぬ事となる。

さて其の材料は何を標準として、選擇すべきか

と言ふに、一方にはそれが幼兒の心身の發達程度に相應する事が必要であり、他方には、幼兒の現在及將來の生活に價値あるものである事が必要である。と森川教授は其の幼稚園教育事項要目中に述べられてあります。

そこで幼兒の圖畫、描き方遊びなるものは、果して上述の條件即ち幼兒の心身の發達程度に相應するものなりや否や、また現在及將來の生活につて價値あるものなりや否やを究明する事によつて、此の問題は解決し得る事と考へられます。

さて同要目第二頁に、幼兒の美的感情は極めて

幼稚なものであるが、併し次第に形の均合、色の配合、といふが如きことに就て感得する事が出来て、これを自己の製作物の上に、あらはすものであると、言はれています。

これによつても、描き方遊びは其の心理的發達に相應するもので、まづ前述の條件の第一にかなふものであることを知ります。

- 次に同要目廿八頁に、圖畫の教育的價値として、  
 1、描畫による自由表現の要求の満足、並に其の方法の知識及技能の修得。  
 2、描畫發表により思想の明確を得ること。  
 3、自然並に美術品に對する欣賞力を養ふこと  
 4、描畫材料に關する智識の修得並に用具の取扱上の習熟。

の四項を擧げられ、また前述第二頁中に、積木、粘土、細工、圖畫などは、丁度、建築、彫塑、繪畫といふが如き、藝術の初步の學習と見ることも

出来る、と述べられてゐる事などによつて、圖畫は幼兒の現在及將來の生活に價値あるものであると云ふ事が分るのであります。

こゝに於て、圖畫は幼兒の心身の發達程度に相應するものであり、且つ幼兒の現在及將來の生活にとつても價値あるものである事が究明されたわけであります。

この故に、圖畫は教育的價値ある、よき活動の資料であるとして、幼兒の保育項目中に加へられ、今日何處の幼稚園に於ても、描き方遊びがなされてゐるわけなのであります。

### ▽幼稚園ではどんな方法で繪をかくせるのでせう▽

此頃、急に小學校などで、やれ勞作教育だとか作業主義の教育だとか、勤勞教育だとか、やかましく言はれる様になりましたが、結局兒童の生活

に即した教育を仕様、合自然的な教育をして行かうとするのに、他ならないのかと思ひます。

ひるがへつてこれを幼稚園の教育に就て眺めて見ますのに、今更ら事新らしく論ずるまでもありませんので、今までとても從來の學習學校などとは、殆ど其の立場を異にし、幼稚園の教育とは、全く遊びの指導である、幼兒の生活の充實であると心得て一路邁進して參つたのであります。空な觀念の詰込などは、邪道の極として排斥したのであります。其の餘りは文字だとか、數だとかは、幼稚園で口にするさへ大罪を犯すものゝ様に考へられた場合もあつたかの様であります。これは幼兒教育の眞精神の理解に十分でなかつた一部の人々の、斯道に忠實すぎた餘弊ではありませうが、これによつても從來幼兒教育に従つた人々の心意氣が分ると思ひます。そして幼稚園の教育は今もやはり注入的、觀念的な方法を避ける事に變りな

く、専ら幼兒生活の充實進展につとめてゐるのであります。

そこで幼稚園で繪を描かせる精神について、考へて見ましても、幼稚園では、將來繪かきをつく爲めの準備として繪をかゝせるとか、單に繪を上手にする爲めにやらせるとか等と、考ふべきでなく、全く幼兒自身の生活に愉悦を感じしめ、満足を與へ、以て其の生活を充實進展せしめ様とするに他ならぬのであります。

次に幼稚園で繪を描かせる場合の具體的實際例をいくつか挙げて、御参考に供したいと思ひます。

#### (一)

朝出勤して、包を机の上へ置くなり、お庭の方へ飛び出して行きました。まだ八時にならないのにもうち庭の方から、嬉々として元氣な子供達の聲が聞えるのです。自分の口から言ふのは變にはゞかる様ですが、本當に子供好きな私

なんです。其の私にあゝした可愛々々三十人の幼児が與へられる事になつた今の境遇なんです。朝、眼が覺めると、もう可愛子達の笑顔が散らつります。元氣でうつくしい聲々が耳へひどいて来る様です。いゝえ、本當を言ひますと、寝ても覺めて私の頭の中は子供の事で、いつもいづぱいのです。

そんな私なんですから、あの子供達の張りきつた元氣な聲を聞いては、全くちつとして居られませんでした。

皆んなが私を見つけるなり

「先生 お早う！」

などと、口々に朝の挨拶を致します。

「まあ！ も元氣ね。何をそんなに笑つてゐたの！」

「あのね先生！ 正彦さんね、僕のお父さんこんな口髯はやしてゐるつて、かいたのよ。」

「そしたらね、先生！ 一美さんは僕のお父さんは、こんなに長いぞつて、あれ書いたの」「ホー、それで笑つてゐたの！ でもまあち上手ね。」

こんな問答をしてゐるうちに段々登園して、子供の數は増して來ます。そして私達の方へと集つて來ます。

「先生！ 僕兵隊さんかけます。」

「先生！ あたしも母さんようかきます。」

などと、申し出る子供があります。

「さうを—えらいのね、ぢやあ書いて見せて頂戴と申しますと、

「はい」

と、お返事をして、いそくとかき始めます。

こんな事から、あつちでも、こつちでも、木切れや棒切れ、さては飛びぐのご石（白い線をひくのに用ふる）ポケットから持ち出しなどし

て、地面に繪をかく事が始まりました。

一人むし／＼とかいてゐる子供もあれば、二人三人何か樂しげに語らひながら書いてゐるものもある。

「先生、先生、」

と、私を呼んで自分の繪を見よといふ子供もある。こうして見て廻るうちには、本當に地面にかいたのが惜しい、残して置きたいと思ふ様なものもある。話したり、笑つたり、ほめたり、はげましたり、知らぬ間に一時間近い時間がたつてゐました。

思ひ返して見ると、なんと楽しい朝の時間であつたことよ。本當に子供達はよく遊んでくれました。私も全く夢中であります。殊に正彦さん、一美さん、照代さんなどの繪のうまくなつたこと！

私にとつてあの子供らを遊ぶこと、あの子ら

の繪を見る事が、眞に大きな喜びの一つです。

(二)

會集がすんで（朝の集り）からも外に出ました。子供達はどうするだらうと思つて見てゐますと ブランコに走るもの、滑臺に行くもの、廻轉塔に乗るもの、思ひ／＼にくの子の様に散らばつて行きました。喧嘩をせぬ様に、泣かない様に、危険のない様に、一人我慢をさせぬ様にと、私の心には油斷がありませんでした。一團の者は汽車ごっこを始めてゐます。修一さんは驛長さんです。友好さんと、秀夫さんは汽罐車です。修一さんが手を擧げると、友好さんの汽罐車の後へ、男の子も女の子も、大勢のち客様がつながり合つて、走り出します。汽罐車がブゥーと氣笛を鳴らしますと、後の客車——ち客様——まで、ブゥー、ブゥーと鳴らします。

山を、ぐるりと一廻りして来ますと、

「のぞせう？」

「皆さん、これまででござります。」

「こんどはうなづいて見せます。」

と、修一さんは申します。さうすると、こん

「おあ！ 行きませう」

どは秀夫さんと、汽罐車は代ります。

二人をつれて行つて、

「皆さん、お早く願ひます。」

と、言つて修一さんが手を擧げると、また走

り出します。私もしばらく見とれてゐましたが

「こゝへ入れてあげませう。」

ふと氣づくと、いつも氣弱の行雄さんと恵美子

「こゝへ這入つて頂戴！」

さんも、其のそばに行つて立つてゐます。

「あや！ どうするか知ら？」

さう思つて、ぢつと見てゐましたが、果して

あちらからも、こちらからも、にはかに大歎

迎です。こうして二人の氣弱さんも、でも嬉し

さうに、いつしょに走つて居ります。私はそば

について、尙も様子を見て居りました。

其のうちに誰か、

が言へなくて、しょんぼりとして私の方へ近づいて来ます。

「どうしたの？」

「どうしたの？」

「先生！ 汽罐車になつて頂戴」

「どうしたの？」

だまつてゐます。

「行雄さんも、恵美ちゃんも、お汽車ごっこした

「あゝ！ 先生の汽罐車やあ！」

「あゝ！大きな汽罐車やあ！」

そんな聲々がして、見る間に大勢のち客様が

つながりました。驛長さんや、先の汽罐車さん

も、いつの間にかち客様になつて、ちやんと乗  
りこんでゐます。

「あら！驛長さんがないと汽車は出ませんよ。」

と言ひますと、

「修ちやん！早う驛長さんになつて！」

と、叫ぶ子があります。

「さあ、修ちやん！」

と、私が促しますと、それでも一寸列を離れ

て手をあげました。そしてまた直ぐに元の場所

に、飛びこみました。今度の汽車がお山を廻は

る頃には、あつちから、こつちから、ち客様が

加はつて、長い／＼汽車になつたのです。それ

で汽車のち道も變へねばなりません。お山を廻

つて、トンネルぬけて、お橋を渡つて、花壇を

縫つて、お庭の中をあちらへこちらへ走り廻は  
りました。

そして少し疲れたので、

「さあ！一休み致しませう。」

と、言つて、ベンチに腰を下しました。

また子供達は思ひ／＼の場所に散つて行きましたが、私のそばで疲れを休めてゐる子供もあります。其のうち、一人二人また繪を書き始めました。勿論私も仲間入りを致しました。また私の周圍に子供が集つて參りました。

「紙へ書きたいなあ！」

突然さう叫んだのは秀憲さんでした。

「クレオンで書きたいなあ！」

さう言つたのは、道雄さんでした。そして女の子まで

「先生！紙へかゝして頂戴」

「先生、あたしにも！」

と申し出ます。

「ほほほッ」

「さう！ お外で隨分遊んだから、それじゃお部屋へ這入つて、繪を書きませうかね。」

と、笑ひ聲をたてゝゐます。  
やつと配つてしまひました。

「あゝ嬉し」

「先生！ 紙とクレオンよ。」

「ああ！ どんな繪を書きませう？」  
と申しますと、

「えゝ、紙とクレオンにしますとも」

「先生！ 先生！」

「あゝ嬉しい」

と、あちらからも、こちらからも手を擧げま

「嬉しいなあ！」

手をたゝいて喜んでゐます。

「益ちやんは？」

「あの——汽車ごっこを書きませう」

「孝さんには？」

「僕——先生の汽罐車のね、汽車ごっこ——。」

「あたしね、ぶらんこがきます。」

「寛ちゃんには？」

「あたしね、ぶらんこがきます。」

「稔さんは？」

「僕、入營——。」

「まあ！ 入營！ でも面白うのね。」

「ふふ」

「先生！僕とこの兄さん昨日入營したの」

「まあ！それでそれはあめでたう。」

「僕も送りに行つたの、旗たてゝね、兵舎へ人が

澤山々々行つてたよ。」

「それはちにぎやかだつたでせう。稔ちゃんのち  
兄ちゃん兵隊さんになつたのね。えらいわね  
え！まあ其時の事をかいたら、きっと面白いの  
が出来ませう。今日はブランコ、汽車ごっこ、  
それから入營——色々かく事がありますのね、  
まだ／＼他にもあります。さあ！それでは皆  
んなにかいて頂きませう。」

子供達は嬉々としてかき始めました。

「……………。」

だまつて、につこりして、切りに私を手招き  
するのは精ちゃんです。そばへ寄つて行くと、

自分のかいた繪を指して、  
「ハ……………。」

と笑ひます。

「ちや！どうしたところなの？」

ときりますと、

「お母さんね、榮ちゃんの、と、とのみをしてる、  
の、お骨たつたらいけないでせう？」

こんな説明をしてくれます。それでもどうやら  
丸蠶に結つた、お母さんらしい人を書いてゐ  
ます。二本のお箸は、かまどの火箸の様に、丈夫  
なのにもほゝ笑ませられます。

他の方では、ピーツ、プウーツなどと、一人  
ごとを言ひながら、我を忘れて汽車ごっこをか  
いてゐる子供もあります。

さうかと思ふと、ひょっこりかく手をやめて

「先生、バスの方が背が高いでせう？」

と、尋ねる子があります。それで見に行きます  
と、交叉點での交通整理の様子をかこうとして、  
自動車をかきかけた子供の質問だつたのです。

こうして、説明をきいたら、相談に預かつたり、さては手のつかぬ子にヒントを與へたりして、時間は知らぬ間に、そして樂しくたつて行きました。子供にとつても、私にとつても何といふ恵まれた時間だつたでせう！

三

今日は空には一點の雲もない良い秋日和でした。朝集つた子供達の顔を見るとどの子も、どこの子も、晴れ／＼として、生々として、喜びに満ちあふれてゐる様に見えました。私の胸にも何だか嬉しさがいっぱいになつてゐる様でした。

うわア」と、ときの聲をあげると共に、手をたぐやら走り廻はるやら、しばしの間は大騒動でした。それでもお帽子をかむつて、お靴もはいて、お外に出た時には、我先にと整列してくれました。往復途中のお話や、公園で遊ぶ時の心得などもかゞやかしいお顔で、如何にも得心がいったらしく聞いてゐてくれました。

幼稚園の門を出ると『道は左』などと、私のいふ事を先廻りして言つてゐる子供もあります

す

愈々公園へつくと、もう

「先生、動物園へ行きませう。」

「先生、お猿が金網ゆするんです。」

私は思はず知らず、全く瞬間的に、それは丁度小さい時に、突然楽しい事を思ひ出して、急に友達に誘ひかける様に、「今日は公園へ遊びに行きませう?」と、子供達に話かけてゐました。

それで子供の希望通り、第一に動物園へ行きました。今日は暖かいせいか、まだ午前だのに相當人も來てゐます。動物達もやはり気持ちがよいのか、お部屋にちぢこまるものは少なく、大

私も思つたものですから、  
にも見なさうにしてゐます。』「機会だ。」『さう

九

と、思ひ立つ  
「わあ、どうぞ」

あつさりと、気持ちよく承諾してくれました。それで早速先生を子供達に紹介して

「この方はね、×××学校の××先生です。おあ！先生今日はを致しませう。」

それから運動場の方に、花園の方にと歩き廻はつて、とうく、お城の所に出て來ました。

あゝ！寫生々々

「それでは、お兄ちゃんや、お姉ちゃんの寫生を見せて頂きませう。お邪魔をしない様に皆さん良い子になつてね。」

と、言つて、分れを致しました。

子供達の口々から呼ばれました。見るとどこかの學校の生徒が、先生につれられて來てゐるのでした。三々五々、思ひ／＼の場所を選んで今寫生の真最中です。子供達はと見ると、如何

が、學校の大きいお兄ちゃんや、お姉ちゃんに

突然こうして接する事でもあり、且つは何でも

人のする事は見たいいつけいの人達の事どこか

案じる程の事もなくて、だまつて其の後にたつ

者、或は脇の方にしやがむ者、それはとくべ

ながら静かに見てゐる様です。

しばらくすると、ぼつ／＼お兄ちゃんや、お

姉ちゃんと、お話をしてゐるのも見つかります。

きつとお兄ちゃんやお姉ちゃん達から話かけて

くれたのでせう。中には落したゴムを拾つてあ

げたり、飛びかけた紙を壓へてあげたり、ちょ

い／＼と御用をさせて貰つてゐる子供もあらま

す。

時計を見ると、お午にもう間もありません。

生徒の方々もお歸りにならねばならぬでせう。

先生にも生徒の方々にも『左様なら』をして公園の途につきました。歸る道々、

「隆さん寫生ようする？」

「ようする！」

「正ちゃんは？」

「僕、日曜に兄ちゃんと寫生に行つたんだよ。」

「僕らも寫生したいなあ！」

などと、あちこち寫生の話で持ちきりの様子

です。愈々幼稚園へ着きました。そしてお席へ

ついてから、子供達と私の間に早速今日の公園

でのお話を始まりました。其の時誰か今見て

來た寫生の話を仕出すと、元氣なそして繪すき

な誠一郎さんは、

「先生、寫生につれて行つて！」

と申しますと、

「先生、僕もよ。」

「先生、あたしもよ。」

などと、可愛い希望が出ます。かへる道々で

の様子といひ、今私の小さい人達が、どんなに

自分より大きな人達の寫生といふものに、あこ  
がれてゐるかど分ります。

「えへ、それでは私達も寫生に行きませう。」

と申しますと、手をたゝいて喜びます。

「先生！本當？」

「先生！いつ？」

矢つき早に、こんな事をさく子供もあります。

「さあ！お天氣がよかつたら明日でも」

さう答へますと、

「あゝ嬉しひ—ッ」

と、心から嬉しさうな叫び聲を出します。

「それからね、紙をのせる紐のりいた、あの大き

な板も、それから腰掛も、かしてあげます。」

と申しますと、

「やあ—ッ」

と、もうたがひぬといふ風に皆んなが叫び聲  
をあげます。

「先生、幼稚園にそんなんあるの？」

「先生、あんな三本のち腰掛？」

などと聞く子供もあります。

「ええへ、ちやーんと用意をしてゐるのです。  
ち腰掛はね、もつと軽い皆さんが持ちやすい  
のがあります。」

さう申しますと、

「嬉しひなあッ」

と言つて、手をたゝくかと思へば、

「うま～、ぞッ」

などと言つて、皆んなを笑はせる子供もあり  
ます。

「さあ！だから明日もお元氣にいらつしやい。」

子供の希望を、こう明日に結んで、今日を終  
る事に致しました。

子供を門まで送り出して、お部屋に戻つて來  
ると、さすがに大浪のひいた後の様な静かさを

感じます。しばらくは

「今日は少しお歸りが遅くなつたから、さつさと  
お歸りなさい。」

と、お迎へのない子供に注意はしたものゝ、

家庭では心配をしないだらうか？そんな事を考

へてゐましたが、それがいつしか明日の希望に

もえて、かゞやかしい眼と眼で、むつまじく語  
らひながら、道をいそぐ子供の姿と變つてゐま

した。

かと思ふと、迎への人に引きとられて行く子  
が、

「先生、きつとね。」

と、言はぬばかりに、自分を眺めかへしてい  
つた眼ざしが散らつきます。

今日半日の思ひは、それからそれへと走馬燈  
の様にくりひろげられて行きます。まことに美  
はしく、本当に樂しく！

「來た／＼。」

ふと氣づくと、まだち午の食事もしないで、

保育室の一偶に座つてゐる自分でした。

さあ！明日の準備をしなくては——急いで食

事をとりました。

× × × × ×

快晴！

それは今日のためにのみ、作られた文字の様に  
さへ思はれます。

人の影うつして見たし秋の空。

と、尋五の弟の得意の句がチラツと、胸をか  
すめて通ります。「あッさうだ」——子供達との  
約束を思ひ出しますと、もうぢつとして居られ  
ません。お辨當と包をひつかへると

「何をそんなに、そわ／＼してゐるの？」

といふお母さんの聲も、さつさと後へ聞き流  
して、超特急振りで幼稚園へ急ぎました。

「ばんざーい。」

私が御門の所へ近づくと、子供達はこの有様です。お庭で遊ぶことさへしないで、今日の樂しさの爲めに、私をこゝまで来て待ちかまへてゐたのでせう。

思はず知らずほゝ笑ませられた私は、可愛い人々の挨拶に答へると共に、あつむを一々なでてやりました。

識員室に來て包みをといてゐる間にも、

「先生 いつから行くの？」

「先生、畫板どこにあるの？」

などと、お外から尋ねてゐます。

愈々出發となりました。其時の子供達の喜び！——それはもう昨日にも倍して大きな、いえむしろ烈しいものでありました。

公園へ着きました。

「どこをかきませう？」

と尋ねますと、それは殆ど異口同音と言つて

もいゝ位に、

「お城の所です。」

と答へます。それで子供の希望通りにきめて昨日の場所に参りました。そして簡単に危険な所に行かない様にといふ意味の注意を二つ三つして、

「さあ！こゝからどこでもおかき。」

と言つて、わがれの禮を致しました。

むかしスバルタの武士が戦の盾をさげた様に、と言へば餘りに仰山過ぎるが、全く子蜘蛛を散板を引きづつて、思ひ々々場所にわかれで行く姿は、げに可愛くも、勇ましい未來畫壇への小戦士達です。

意味が分つてか分らずにか、只昨日見たまゝに、眼をほそめ、鉛筆を突き出して、向ふをた

める様なしなをする者あり、両手をくんぐ考へ  
こむ者あり、胸を張り、両手を膝につつたてゝ  
自然を大觀すると言つた風のがあり、早やかい  
ては消し、消してはかき、ゴムの粉を吹きとば  
しつゝ、急がしげな手つきの者あり、眼と眼と  
見交して、包みされぬと言つた風にほゝ笑み合  
ふあり、今や戦士の戦、正にたけなはであります。  
まことに其の姿こそ色々ながら、子供等の得意や思ふべしであります。

子供らは今時を忘れ、年を忘れ——全く學校の子供にならきつてゐるのです。そして天下一大傑作を——むしろ神品を——つくるべく、有らん限りの腕をふるつてゐるのです。  
そして私は——私も亦何もかも忘れて、只こ  
うして子供と共にある幸福にひたりつゝ、いそ  
／＼とたち廻つてゐるのです。——それから  
今日の此の繪は皆んなお部屋にはり出して——

これまでの分も加へて——私の組の展覽會をするつもりです。そして他の組の先生やお子さん方、出來るなら私の組のお母さん方もお招きして見て頂きませう。

嗚呼！ 其の時の計畫と考案、それに子供達の喜び、今思つても胸がおどる様です。

以上は私が一人の保母になつたつもりで、其の生活記録的に書いて見たものですが、こうした例をあげますなら、まだ／＼澤山書かねばならぬと思ひますが、今は一まづこれで打ち切ります。

要するに、小學校の圖畫教授などの様に劃然と今からは圖畫教授であるなどといふ態度には出られないでの、繪を描かせるといふ事は、全く一つなりの幼兒の生活の中(遊びの中の)一部分、一出來事であると申したいのであります。

しかし無論吾々としては、圖畫教育に對する一通りの見識は持つて居なくてはならぬのであります、實際的な表はれとしては、右の如くでなければならぬと思ふのであります。(つゞく)